

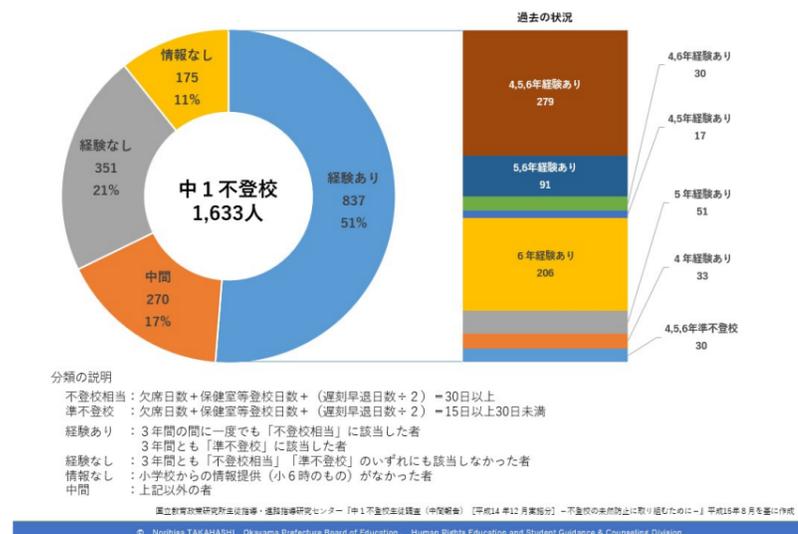
生徒指導
Leaflet @ OKAYAMA
リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

過去の状況に着目する意味

皆さんは「中1ギャップ」にどのようなイメージを持たれていますか？
「小学校と中学校の生活が大きく変わり、中学校1年生で不登校が増える」といった感じでしょうか？確かに統計上は、小6から中1にかけて不登校・長期欠席ともに、他の学年間よりも増加の割合が高く、あたかも「進学という段差」の問題という捉えが一般的でしょう。しかし、この課題は長らく指摘され、解消に向けた数々の取組が行われています。にも関わらず、上記の様な傾向が改善されない背景には何があるのでしょうか？

国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センターが行った中学校1年生段階で不登校状態にあった生徒の小学校時代の様子について行った調査によると、該当生徒の半数が



「小4～小6のいずれかで30日以上の欠席相当の経験を持っていた」ことが明らかになっています。つまり、元々、学校を休みやすい傾向のある生徒が、小中間の環境の変化で顕在化している可能性が高いということです。実は小学校段階から中1ギャップの課題は始まっていると言えるのです。

このコラムをお読みいただいているちょうど今、多くの学校で進学時の引き継ぎが行われていると思いますが、本年度(小6)の様子だけでなく、過去(少なくとも3年間程度)の出欠席の状況から、中1ギャップに陥りそうな児童生徒をリスト化するなどして、入学式に備える体制をつくってみては？中高間の接続も含めて「今からできる対策」として。(高橋)

不登校対策
～年度末・年度初めに
取り組むこと～

本県の生徒指導上の重点課題である「不登校対策」ですが、時期によって注意すべきポイントや支援対象者は変化してきます。
児童生徒にとって環境が大きく変化する今、取り組むべきことについて考えてみます。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

〒700-8570
岡山県岡山市北区内山下2-4-6
Tel:086-226-7589 Fax:086-224-2134



Q. 学校の「不登校対策」について、年度初めの時期からできることはありますか？

A. 文部科学省の調査※では、年間30日以上欠席した児童生徒を長期欠席者としていますが、対策を行う上で「休み始める前」からの初期対応が重要であることは、疑問の余地はないと思います。具体的には、前年度までの出欠席状況や過去の不登校経験の有無の確認、それらに基づく学級編成の工夫など、実は前年度末から考えておかなければならないことも少なくありません。

特に、児童生徒にとっての始業式（クラス替え）は大変ストレスが高いと言われており、人間関係づくりのゲームなど対人不安を軽減するような学級開きの工夫も求められます。また、始業式初日から数日間、どのような学校生活を送ることができるかは、その後の1年間を大きく左右すると言っても良いかもしれません。一時期、授業時数の確保等で始業式当日もしくは翌日から給食が始まり、フルタイムで授業が行われる学校も多くありましたが、近年では、休業明けの日程に余裕を持たせることで、少しずつ学校生活のリズムを確立していくという工夫を行っている学校もあります。

基本は「児童生徒の変化(サイン)に気付く」

当然のことですが、「児童生徒の変化(サイン)」を見逃さず、早期に支援することが大切です。児童生徒が示す不登校の兆(きざ)し【図1】について共通理解を図り、

チェックリストなど小さな変化が見落とされることなく、情報が集まってくる仕組みを作っておくことも有効です。その際、個々の先生方の「視点(気を付けて見るポイント)」を交流し合うことも、全員で初期対応に取り組む気運を高めることに繋がります。

健康面	<input type="checkbox"/> 欠席・遅刻・早退が多くなる <input type="checkbox"/> 保健室や相談室に行く回数が増える <input type="checkbox"/> 給食を残しがちになる など
学習面	<input type="checkbox"/> 休日の次の日や特定の曜日、特定の教科がある日に欠席が多くなる <input type="checkbox"/> 授業中にぼんやりするなど、学習意欲が低下する <input type="checkbox"/> 提出物が出なくなる <input type="checkbox"/> 成績や急に下がる など
人間関係面	<input type="checkbox"/> 友達と遊ばなくなり、一人でいることが多くなる <input type="checkbox"/> 元気がなくなり、表情も暗く、笑顔が消える <input type="checkbox"/> 教師と距離を置く(過度に近づく) など
家庭生活面	<input type="checkbox"/> 生活全般で無気力になる <input type="checkbox"/> 部屋に閉じこもりがちになる <input type="checkbox"/> スマホやゲームの時間が急に増える <input type="checkbox"/> 学校や勉強のことを話題にすると不機嫌になる <input type="checkbox"/> 起きるのが遅くなり、部屋(布団)から出てこない <input type="checkbox"/> 朝食があまり進まず食べようとしないうる <input type="checkbox"/> 朝になると頭痛や腹痛を訴えるようになる など

【図1】不登校の兆(きざ)しの例

対策は、欠席が始まる前から



『提要』のダウンロードはコチラ

詳しく知りたい方は、「岡山型長期欠席・不登校対策スタンダードα」を検索

また、主として家庭生活面の情報を集めるためには、家庭との密な情報交換が必要になります。すべての児童生徒を対象にすることは難しいかと思いますが、過去の出欠席状況や不登校経験の有無からリスクの高い児童生徒を予めリストアップしておいて、意識的に変化を見取る体制をつくることも必要でしょう。

「欠席」に対して敏感に、かつ温かく対応

私が子どもだった頃(半世紀近く前ですが)は、保護者も「ちょっとくらいの熱なら学校に行って、途中でダメなら早退しなさい」とか「朝から微熱があるのですが、とりあえず病院で診てもらってから登校させます」といった感じだった気がします。子どもの側も、家でじっとしているよりは学校に行った方が楽しいので、多少の熱があっても登校していたような気がします。もちろん、調子が悪い時にはしっかり休養して次に備えるべきですが、新型コロナウイルス感染症の影響や自宅でも子どもが過ごせる環境が整ったこともあり、以前と比べて学校を休みやすくなっていることは間違いないでしょう(Vol.24「コラム」参照)。

不登校児童生徒への対応は、慎重さが求められることもありますが、どのような場合でも「欠席3日目までの対応」【図2】は必ず行い、児童生徒の状況を的確に把握して、一人ひとりに応じた対応を行うことが重要です。休み始めの段階は、「そっとしておく」のではなく、何らかの登校アプローチを行い、本人が学校に通いづらい原因の把握と解消に向けた支援方針を立て、早期に具体的な対応を行うことが求められます。学校を休みやすくなっている今、初期対応の重要性は増していると言えます。

1 日目 **本人の状況を確認する**

- 児童生徒は1日休んでも、再登校には不安があります。休んでも安心して登校できるよう、担任等が電話で声かけをします。
- 病欠欠席の連絡を受けたら、病状や医療機関の受診状況、その日の過ごし方を尋ねるなどして、児童生徒の様子を把握することが大切です。

2 日目 **本人の状況を再確認する**
場合によっては、家庭訪問を行う

- 家庭訪問などを行い、「君のことを心配しているよ」「待っているよ」などの気持ちを伝え、安心して再登校できるように支援します。

3 日目 **家庭訪問を行い、本人と話をし様子を確認するとともに、保護者とも最近の様子について話を**

- 児童生徒の心身のバランスが崩れている可能性があります。友人関係、学業、部活動、家族との関係等に何らかの悩みを抱えているかもしれません。「困っていることはない?」「体調は悪くない?」などと声をかけ、じっくりと寄り添います。
- 長欠・不登校を疑うことが必要な場合があります。担任からの温かい声かけが大切です。
- 保護者にも、児童生徒の様子が心配であることを伝え、家庭での様子を聞きます。
- 管理職に欠席理由、対応状況等を報告し、支援チーム会議の開催など学校としての対応を検討します。

注：過去の欠席状況等から長欠・不登校になる可能性の高い児童生徒がいると考えられる場合は、更に迅速な対応を行います。

© Nozohisa TAKAHASHI Okayama Prefecture Board of Education, Human Rights Education and Student Guidance & Counseling Division

【図2】欠席3日目までの対応(適切な登校アプローチ)

POINT

早めの対応が登校不安の軽減に繋がる。